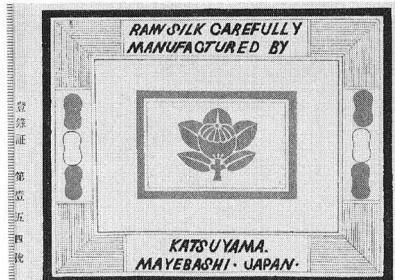
佐野理八
特選折返糸商標前橋商人
勝山善三郎の商標

開港のひば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日/平成2年8月1日
印 刷/角川三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第020055号 類別・分類C-BE160

生糸商標のはじまり

展示資料の中から

今回の展示は、横浜開港以降の日本製糸業の発展史を軸にし、アクセントに当館が大量（約四千点）に所蔵する生糸商標（ラベル）を随所に散りばめた。気になったのは、そもそも生糸商標がいつごろから使われたのか、

明治中期以降に数多く使われたような、ほぼ写真のサービス判大の出荷者（ふつう製糸家・产地商人、まれに貿易業者）特有の図案と出荷者名・産地などがはいったものを考えよう。

江戸時代の生糸の荷の形は、産地によってさまざまであった。その中には、生糸の束に巻紙したり紙を付けたものがあり、产地・出荷者・生産者を表示する字が書かれていたこともあっただろう。しかし、図柄のあつた事実は確認できない。

生糸に巻きつける紙で絵があったのは、一八七三年の生糸製造取締規則（一月発布）の追加規則（同年四月）による鉄砲造（生糸の束のつくり方の一つ）用の「化粧紙」である。この規則は、

することを定め、政府機関的な地方の生糸改会社の専売する印紙を生糸に付けることを生産者が義務づけた。すべての生糸には、地方改会社の印と製造人の名前・国名が記入された封印紙がつき、鉄砲造の生糸はさらに、全国一律に同じ絵柄の化粧紙で巻かれた。この規則の有効な間は、生糸商標は存在しなかった

ように思われる。

外国側から「ギルド」であるとの反対があつて、この規則は、同年九月には、実質的な廃止状態となつた（法的な正式の廃止は一八七七年）。この後に、生糸商標が誕生するらしい。

図柄のある生糸商標で筆者が確認した最も古いものは、一八七五年から使用されたという福島の佐野組のそれである。藤本実也は、これについて「(この)娘印商標は明治八年より付した

最初の商標にして、實に日本の商品にして外国に行く物品に確定せる商標を付せるは、當時に在て珍しき物である」と述べている（日本蚕糸業史 第一卷 一六四頁）。

一八八四年商標条例が布達さ

れ、すべて商品の商標は、その出願によつて農商務省の商標登録所で審査され、登録されることになつた（同年一〇月実施）。生糸商標の初めての登録は出願・審査を経て、翌一八八五年六月八日にまとめて行われた。この時、登録されたのは、商標番号一五四～一八〇番の商標のもので、番号はすべての商品にわたつて通し番号であった。したがつて、このうちで最も若い一五四番の群馬県前橋の勝山善三郎（大生糸商人）の商標が、生糸商標で最も若い登録番号をもつ。勝山は、商標条例実施日である一八八四年一〇月一日に申請しているが、この翌年六月八日登録の二七件の出願の順と商標番号の順は、審査の問題からか、必ずしも一致しない。

生糸商標の使用は、この商標登録が始まることにはかなり普及していた。その後、商標の登録制度が続き今日にいたるが、第二次大戦前には、登録しない商標も随分あつたようである。以上、一応の結論として、生糸商標のはじまりは、一八七〇年代の半ばで、その普及が、器械製糸場・改良座練の勃興する一八八〇年代である、としておこう。大方のご教示をお願い申し上げる。（井川克彦）

座談

『商標に見る生糸の歴史』展に寄せて

今回の展示『商標に見る生糸の歴史』は、製糸業の発達に視点を置いていますが、養蚕・製糸業の研究は、これまで農村の資料を使って発達してきた面が大きいと思います。そこで今回の座談は、蚕糸業関係資料の調査・研究に造詣の深い上山和雄さんと平野正裕さんのお二人を迎えて、資料の発掘・調査などを中心によもやまのお話をしていただきまし

井川 上山さんは現在、国学院大学教授でいらっしゃいますが、かつて横浜開港資料館の開設準備に携わられ、蚕糸業関係資料の発掘・収集に尽力されました。また、現在は『横浜市史』Ⅱ(新市史)の編集委員として製糸業・貿易を担当されています。まず最初に蚕糸業の研究に手を染められたきっかけからお話しください。

上山 学生時代に『横浜市史』を読ん

で、明治初年の生糸の統制に興味を引かれ、生糸改会社に関する長野県の県庁文書を見直してみようとしたのがきっかけです。大学院では、卒論を発展させ、蚕糸業政策をとりあげようとしたのですが、ちょうど石井寛治先生の大著『日本蚕糸業史分析』が刊行され、

一挙に蚕糸業をやる気を失つてしまい

ました。しかし、修士論文として準備を始めていたのである程度やらざるを得なくて、政策から蚕糸業に重心を移すのではなく、蚕糸業を切って政策の方に行くという方向で修士論文の軌道修正をしました。博士課程の初期には、政策の方をやりました。蚕糸業の方に戻った理由は、一つには政策分析が今一つヴィヴィッドでないという点、時間が経つて石井先生の本の影響が私にとって薄れてきたからです。しかし

石井寛治先生や海野福寿先生などの業績があるので、製糸業そのものよりも養蚕業や蚕種業などの蚕糸業の周辺部から仕事を始めました。具体的には、長野県上田の蚕種製造業者とか、養蚕農家の資料を探して歩き、それをもとに研究を進めました。

井川 今お話しの資料はどのような形で残されていたのですか。またどうやって資料を見る事ができたのですか。

上山 上田には市立博物館がありますが、そこを拠点にして調査を行ないました。市立博物館には近代の資料もたくさん所蔵されていたのですが、當勤の学習員の方は考古学が専門で、近世・近代の資料は、必ずしも十分に整理されていない状態でした。収蔵庫を持見

させて頂くと、長持ちの中に蚕種の製造・輸出に携わり、横浜の原商店と密接な関係のあつた竹内家の資料がありました。そこで、これらの資料を閲覧させていただきながら、近隣のまだ博物館に収蔵されていないお宅の資料を探して歩きました。

井川 個人のお宅の資料を見せていただくには、どのようにされたのですか。

上山 あれは夏休みでしたが、夕方から電話を掛けまくり、訪問の約束を取り付け、当時は自動車は勿論のこと、自転車にも乗らず暑い中を調査に出かけたものです。

井川 横浜と関わりを持たれるようになつたのはいつ頃ですか。

上山 一番初めは、横浜市史編集室が

いくには、しっかりとした資料を持つていなくてはならない」という考え方のとで、私は、生糸関係資料を担当することになり、長野県飯田の原當吉家や小諸の小山正邦家の資料を收集しました。

井川 飯田の原家については前の『横浜市史』の時に調査をしていましたが、小山家資料の調査はどうにして始まりましたか。

上山 小山家は全国的に知られた製糸家ですが、中小工場の結社で純水館という製糸場を経営していました。その

分工場とも言うべき茅ヶ崎純水館が茅ヶ崎市にあります。その縁で茅ヶ崎市史の編集に関係していた頃、一九七七年に小山家の資料調査のお許しをいただき小諸を訪問しました。伺う前に



上山和雄氏

野毛の横浜市図書館の一室にあった時です。竹内家の書簡の何点かが横浜にあるということを聞き、筆写原稿を見せて頂きに伺つたのが横浜と関わりを持ったはじめです。その後、こちらの横浜開港資料館設立の準備が始まり、史編纂室や当館の設立準備室による小山家の調査が続けられたのですね。

上山 そうです。資料も少しずつ部分

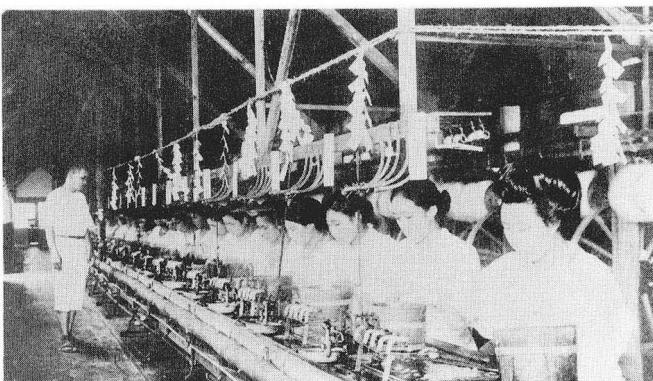
は、資料は仮壇の奥に少しある程度だと聞いていたのですが、行けばほかにも出てくるかも知れないという期待を抱きながら、高村直助先生と私ほか数人で小山家を訪問しました。小山家の御主人は、古い資料のことにはほとんど関心をお持ちでなく、奥様が相手をしてくださいました。「藏の中に何かあるかも知れないが、藏の中までお見せするのを何とか入らせていただくと、したのを何とか入らせていただくと、長持ちの中から膨大な資料が出てきました。

井川 その事がきっかけで、茅ヶ崎市史編纂室や当館の設立準備室による小山家の調査が続けられたのですね。

的にお借りしてきて、マイクロ撮影をやりました。



純水館の生糸商標



茅ヶ崎純水館(織糸作業)

井川 おかげで、現在五二七四点が確認され、目録化され未公開のものもありますが、一部は当館で複製本の形で閲覧できるようになつたわけですね。

上山 一時期、神奈川県茅ヶ崎市の政治家山宮藤吉の研究に時間をかけていました、昨年『陣笠代議士の研究』としてまとめることができました。製糸業については、国内で作られた生糸が横浜に集まり、輸出されるところまでは研究が進んできましたが、輸出先、主にアメリカでどう生糸が使われていたのかという問題、またアメリカ、イタリア、フランスの蚕糸業の動向との関連で、日本の蚕糸業を見返す必要があるだろうという方に関心が行き、国内の製糸業そのものの資料の発掘は手控えていました。

井川 外国の資料を集められたのですか。

上山 初めは、日本語に翻訳されていなかった外国の文献、日本の生糸が盛んに輸出されていた 당시에、外国で日本の生糸がどのように見られていたかと言ふような文献を調べていました。幸いにも、上田蚕糸専門学校の後身である信州大学織維学部にアメリカ、フランス

上山 上山さんはその後、城西大学を経て国学院大学に行かれましたが、その間の研究活動はどうされていたのですか。

井川 上山さんはその後、城西大学を経て国学院大学に行かれましたが、その間の研究活動はどうされていたのですか。

上山 一時期、神奈川県茅ヶ崎市の政治家山宮藤吉の研究に時間をかけていました、昨年『陣笠代議士の研究』としてまとめることができました。製糸業については、国内で作られた生糸が横浜に集まり、輸出されるところまでは研究が進んできましたが、輸出先、主にアメリカでどう生糸が使われていたのかという問題、またアメリカ、イタリア、フランスの蚕糸業の動向との関連で、日本の蚕糸業を見返す必要があるだろうという方に関心が行き、国内の製糸業そのものの資料の発掘は手控えていました。

井川 外国の資料を集められたのですか。

上山 初めは、日本語に翻訳されていなかった外国の文献、日本の生糸が盛んに輸出されていた 당시에、外国で日本の生糸がどのように見られていたかと言ふような文献を調べていました。幸いにも、上田蚕糸専門学校の後身である信州大学織維学部にアメリカ、フランス

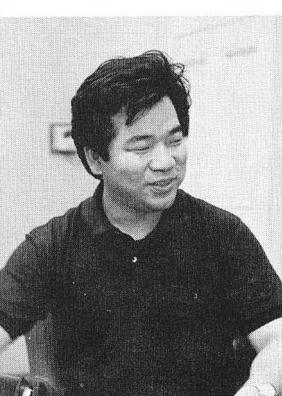
上山 それと、こちらの横浜開港資料館にある十製糸資料も私が紹介しました。城西大学にいた頃、ある古本屋さんが、段ボール箱に入った生糸関係の資料があるので買わないと持ちかけられたのですが、当時は個人で買うわけにもいかず、開港資料館で購入していました。

井川 今回の展示の準備で、横浜開港後二〇～三〇年たったころ、日本の生糸がおもにフランスで消費されていることから、今回の展示にフランスのリヨンの絹織物の絵が使えないだろうかと思い、当館所蔵のフランスの絵入り新聞『イリュストラシオン』を調べてみたところ、一八五一年のリヨンの絹織場の版画が見つかりました。索引のリヨンという地名を頼りに捜したのですが、こういった外国の文献を自在に使えば展示ももっと充実したものになつたのに、残念です。

で発行された雑誌類が膨大にあり、これを調べて集めました。

井川 今回の展示の準備で、横浜開港後二〇～三〇年たったころ、日本の生糸がおもにフランスで消費されていることから、今回の展示にフランスのリヨンの絹織物の絵が使えないだろうかと思い、当館所蔵のフランスの絵入り新聞『イリュストラシオン』を調べてみたところ、一八五一年のリヨンの絹織場の版画が見つかりました。索引のリヨンという地名を頼りに捜したのですが、こういった外国の文献を自在に使えば展示ももっと充実したものになつたのに、残念です。

し、大島栄子さんの上伊那郡の組合製糸に関する業績を検討していくうちに関心が製糸業の方に向いてしまつたのです。



平野正裕氏

平野 私は最初、蚕糸業には関心がなく、青年運動について調べていました。大正末から昭和初年に社会主義的な青年運動が盛んであった長野県の下伊那地方は、運動の担い手が昭和恐慌下で産業組合青年連盟に吸収されていきましたが、そのあたりのことをかつて活躍された方から、お話を伺つてみようと思つたからです。ちょうどそのころ組合製糸の連合体である天竜社が社史を作り終えるところでした。

井川 なぜ飯田に調査に行かれたのですか。
平野 さきほど言いましたように、下伊那地区は青年団運動が盛んなところだつたからです。ちょうどそのころ組合製糸の連合体である天竜社が社史を作り終えたときには、その社史を作り始めようとしているときでした。

平野 私が飯田に行ったのは、その社史を作り始めようとしているときでした。

上山 私が飯田に行つたのは、その社史を作り始めようとしているときでした。

一したままの文献資料の製冊をさせていたがくということで、一ヶ月ほど天竜社の食堂の二階に泊めさせていただいて調査をいたしました。

井川 天竜社は、現在も操業しているのですよね。

平野 ええ、生糸もやつてはいますが、今はこんなにやくの製造などもやつていません。

上山 現在稼働しているものでは、高知の藤村製糸とどちらが大きいですか

平野 天竜社はここ何年間かで規模が小さくなりましたが、調査当時は列を成して並んでる自動織糸機が一〇セツト以上ありましたから、天竜社の方が大きいですね。

井川 ところで、新しい『横浜市史

II』でも蚕糸業・生糸貿易は欠かせないと思いますが、新市史のテーマ・資料収集のポイント等についてお話し下さい。

上山 旧市史と新市史では対象とする時期も違うし、位置付けはおおいに違っています。旧市史は製糸業が横浜にとつて非常に大きな地位を占めていた時期を扱っていましたが、新市史が主として扱う恐慌以後の時期では、日本の製糸業は縮小し、横浜商人の比重も落ちてくるというのが一般論でした。全国的には確かにそういう面もありますが、横浜からの視点では必ずしもそうではありません。たとえば三井物産の横浜支店は依然として物産内で地位を保っています。それは食い扶持と称される

支店固有の事業である生糸部門がしっかりと続いていたからです。また横浜経済の衰退と言われているのは、いろいろなものが混じりあって、増幅されてい

る面があります。一つは全国の輸出量に占める生糸の割合が金額的に減少し、綿織物にトップの座を譲りますが量的にみると減っています。全体的には生糸の地位は下落していますが、横浜での生糸の比重はまだ高く、横浜の経済界は昭和四五年から生糸の下落に伴い停滞しますが、昭和九年頃から

息を吹き返します。生糸の好不況に伴つて横浜商人の浮沈があるようで、生糸の動向は軽視できません。生糸に代わつてトップになつた綿織物は昭和一二年以降、戦時体制下で外貨の手当ができる原料の綿花が輸入できなくなつています。そうなると日本で純粹に輸出産業となり得るのは、やはり、生糸しかないことになります。つまり軍需物資輸入のための外貨獲得手段として生糸が再び脚光を浴び、輸出奨励策が取られました。

また、織維危機に到るまでの織維統制の中、商売ができなくなつた毛織物、綿織物業者が生糸業界に参入してきて生糸相場が沸き立つました。

井川 生糸の輸出先に変化はでてくるのですか。

上山 やはりアメリカが最大ですが、イギリス、オーストラリア、南米などへも拡大されます。

井川 輸出されない国用糸の流通の中

上山 明治から昭和期を通じて横浜だけが中心であつたかというと問題がありますが、横浜だけでなく、地元の浜松の問屋と山梨にまとまつた量を出しています。これは浜松の絹綿交織・山梨の絹織物の原料として向けられたものだと思います。

井川 関東大震災があり、昭和恐慌があつて手痛い打撃を受けた横浜の生糸売込商は、やはり転廃業してしまったですか。

上山 鈴木商店とか渋沢商店など大きな商店が倒産しますが、そこで働くいた生糸関係の人たちは独立して引き続いて生糸の商売をやります。恐慌以後は、売込商、国用生糸の仲継ぎ商など中小の生糸商の数はどんどん増えていきます。それらの人たちは戦後も連綿として商売を続けており、国用糸を中心に入糸も扱っています。

井川 現在までに収集された資料で、何か珍しいものがありますか。

平野 横浜で出された業界誌が出てきました。これまであまり利用されていなかつた雑誌で、旧生糸検査所に所蔵されていました。欠けている部分はシルク博物館のもので補い、ほぼ揃えることができました。

上山 強気と弱気が常に交錯しています。縮小せざるを得ないという意識の反面、アメリカは日本の生糸を抜きにしても軍需産業が成り立たないのだという強気の意識もありました。

井川 生糸を使う軍需品というとどう

いうものですか。

平野 パラシュートと火薬の袋です。

上山 しかしそれも昭和一三年にデュポン社がナイロンを開発して状況が変わつてきます。

平野 そのほかには、石橋次郎八が起こした石橋商店の経営資料があります。これは、昭和期の生糸問屋の経営状況を知る貴重なものです。石橋次郎八は兵庫県の出身で、神戸の生糸商社神栄に入り、横浜詰めの番頭格になります。

横浜店は実質的に神栄の中心になりますが、石橋は昭和二年に独立して、石橋商店を起こしました。石橋商店は横浜に本社を置く数少ない生糸問屋で、現在もシルクセンターの中に本社を構えています。

上山 まだ詳しく読んではいませんが、商店の紹介と番頭格の人の経歴が連載されています。蚕糸局の官僚の意用市場があつたと思います。

平野 私の調べた静岡県の小さな組合製糸は、昭和恐慌下に操業を開始するのですが、横浜だけでなく、地元の浜松の問屋と山梨にまとまつた量を出しています。これは浜松の絹綿交織・山梨の絹織物の原料として向けられたものだと思います。

上山 昭和恐慌後の、横浜商人の生糸にたいする危機意識などもわかるのでしょうか。

井川 何という雑誌ですか。

平野 『シルク』『シルク時報』『蚕糸経済』の三つの月刊誌です。

上山 石橋商店は、最初は売込問屋で取扱い量も少なかつたのですが、二、三年のうちに急速に取扱量を増やし、二、三番目の地位を占めるようになります。その後、昭和八年に正金銀行の仲介で沼津と千葉県我孫子の製糸工場を買収しました。私が行つた我孫子の工場はすでに操業をやめていましたが、機械設備は手入れされて残つていました。

平野 我孫子工場の資料を横浜市史編集室でいただいたのですが、ほとんどが戦前のもので、戦前のものは一四〇箱のうち一箱ほどでしたね。

上山 寄宿舎の守衛さんの日誌があつたから、女工さんの生活がわかるかも知れません。ほかには、四国の筒井製糸の資料、さきほどの神奈川の當業報告、長野県丸子の依田社の資料も良いものです。依田社は製糸工場の連合体なので全体の資料は揃わないのですが、衆議院議員もつとめ、片倉と肩を並べるほどの昭和初期の製糸業界の大立者、工藤善助が経営する製糸工場、カネ三の大正から昭和初期の参考資料がきつちり残っています。

井川 新市史が対象とする時期の、日本における外商の地位はどんなイメージですか。

上山 外商の第一次大戦以降の勢力低下は著しく、輸出商のランクとしては、上位は日本の商社が占め、七、八番目位は日本の大手商社が決ることになるのですね。そういうことになるのですね。

井川 輸出の動向は日本の大手商社が

た生糸をめぐる日本と外国との関係とか、横浜を出た生糸についての外国での研究状況はどうなのですか。

上山 アメリカでは経済史の研究があり盛んでないこともあって、綿織物業者の経営史、産業史についての研究はほとんどありません。生糸が研究の上で注目されるのは二〇世紀初めの綿織物労働者の大争議についてと、綿織物地域の中心の変動に伴う地域の盛衰のパターンの研究です。

井川 絹織物業がアメリカ産業界に占める地位はどの程度だったのですか。

上山 アメリカでは、綿織物業が圧倒的ですが、綿製品は割合に大衆化してきており、それ程小さい規模ではありません。綿製品の輸出先としては綿靴下が南米、オーストラリアなどがありますが、国内消費がほとんどでした。

井川 『横浜市史 II』では、市町村レベルによる海外資料調査の先鞭をつけたといつてもいいでしようが、アメリカの資料調査をされましたが、資料の保存状況はいかがでしたか。

上山 生糸合名会社のニューヨーク支配人新井領一郎関係資料や、占領軍押収文書の中にマルヤコーコーポレイションの資料がありました。また、国立公文書館や連邦議会図書館には、業界誌がきちんと残していました。

井川 絹織物業者や生糸の仲継商の個別の経営資料はありますか。

上山 それはわかりません。しかし郡是産業の社史を作る時に、かつて郡是

と顧問契約をしていたニューヨークの公認会計士事務所を調べたところ、戦前の決算報告が完全に保存されていたのです。つぶれてしまった企業の資料がこういった形で保存されているのは日本では考えられないことです。資料の捜しかたにはいろいろあって、たとえばユダヤ人実業家のライブラリーもあるし、大学図書館に寄贈されている個人資料もあります。直接日本人の資料はなくとも、日本に関係したもの結構含まれています。

井川 逆に国内のことですが、蚕糸業の研究をしていて、常々思っている素朴な疑問について、お考えをお聞きしました。それは、養蚕・製糸で発展したことがその地域に何を残したのだろうかと言うことなのです。養蚕・製糸で栄えた地域も現在はほとんど蚕糸業をやめてしまっていますね。

上山 養蚕地域の人達は、生糸の景気の動向によりどんどん成長して、つぎに衰退し、言わば振り回されてきたのですが、彼等は振り回されながら自分達の生活基盤を作り上げ、安定を図ろうとして、権力への対応の仕方も学んでいました。それは、明治・大正という数十年の事でなく何百年もかかる蓄積していったのだと思います。生糸

井川 最後に新しい『横浜市史 II』の執筆の見通しや抱負についてお聞かせ下さい。

上山 私の分担の中では、貿易、三井物産の活動、対外進出に伴う日米関係などにも触れるので、生糸のことはそれ程の分量にはなりません。しかし私としては、全体を一つの言葉で言い表すのではなく、圧倒的な力を持つものに影響されたながらも、頑張った人たちにできるだけ視点を当て、彼らの役割を

言わないでも、農村の中だけの経済の動きにたいする対応の仕方を見ただけでも成長している様子がうかがえるでしょう。

上山 経済的繁榮とか、商品作物の導入による共同体的秩序の弛緩とか、自らの目覚めなどというところまで話を

井川 最後に新しい『横浜市史 II』の執筆の見通しや抱負についてお聞かせ下さい。

上山 私の分担の中では、貿易、三井物産の活動、対外進出に伴う日米関係などにも触れるので、生糸のことはそれ程の分量にはなりません。しかし私としては、全体を一つの言葉で言い表すのではなく、圧倒的な力を持つものに影響されたながらも、頑張った人たちにできるだけ視点を当て、彼らの役割を

井川 新しい市史の刊行が楽しみですね。本日は長時間貴重なお話をありがとうございました。

上山 聞き手は館員の井川克彦があつた

井川 新しい市史の刊行が楽しみですね。本日は長時間貴重なお話をありがとうございました。

平野 蘭生産力が全国平均の二倍近くとも大きかったでしよう。

上山 それはわかりません。しかし郡是産業の社史を作る時に、かつて郡是

資料よもやまばなし

ロッシュのおばの嘆願書

レオン・ロッシュ（一八〇九—一九〇〇）は、第一代駐日フランス公使と

して幕末期に来日し、イギリス側が倒幕派に近づくのにたいし、積極的な幕府支援策をとつたことで知られており、すでにこれまで、日本外交・政治史上のロッシュ像は、ほぼ明らかにされて

いる。ここではロッシュの個人的な側面に触れた資料をとりあげて、かれの横顔の一端を紹介してみたい。

資料とはロッシュのおばがフランス本国の外相宛に出した三通の嘆願書である。フランス外務省が保管する文書の中には個人記録(Série Personnelle)と呼ばれる資料群があるが、これは「各外交官ごとの職歴記録である。入省時に提出された戸籍や推薦状から、退職しながら見ております。外相閣下、かれにヨーロッパのポストを与えるのは不可能でしようか。ヨーロッパであれば、かれを常に鼓舞してきた祖国にたいする熱意をもつて祖国に奉仕することができるのでしよう。もし、このことが可能であれば、おそらくはこの母親がこの世で哀願するたつたひとつの厚情をいただく」とができますよう、教えて閣下に願い出るものであります。

められている。

おば、シャンパニユ夫人の嘆願書

嘆願書（I）

外相閣下

閣下を^{ハシマ}信頼申し上げて、閣下の寛大なお心にお訴えし、すでに情け容赦ない痛ましい打撃を被つているこの生涯の終わりにあたつて、最後の悲しみをどうか遠ざけていただきたいと願うひとりの母親でございます。

わたくしの甥であり、養子でもあるレオン・ロッシュ氏は、わたくしのもとでその幼年時代を過ごしました。そして、かれの喜びも悲しみも共にしてきました。そのロッシュが、再会できるという希望をなんら残さずに、遠い国へと旅立とうとしているのを愕然としながら見ております。外相閣下、かれにヨーロッパのポストを与えるのは不可能でしようか。ヨーロッパであれば、かれを常に鼓舞してきた祖国にたいする熱意をもつて祖国に奉仕することができるでしよう。もし、このことが可能であれば、おそらくはこの母親がこの世で哀願するたつたひとつの厚情をいただくことができるよう、教えて閣下に願い出るものであります。

嘆願書（II）

外相閣下

わたくしのこの願いを閣下がお聞き届けくださることは、わたくしの晩年に受けることのできた最もおおきな慰めとなりましよう。それは、閣下に、

チュニス領事で、わたくしの養子であるレオン・ロッシュは二〇年前からかれの祖国のためにおおいに尽力していました。義務感、フランスへの愛国心は常にかれを鼓舞し、またこれからもずっとそうであります。この一年間のあいだ、かれはレジオン・ドヌール、オフィシェール帶勲士であります。それがこの勳章のコマンドゥール帶勲士に昇格することは、わたくしの最も切なる願いであります。この願いが閣下より皇帝陛下にお届けいただければ、成就することちがいありません。わたくしは閣下にこの恩情をかけてくださるよう切にお願い申しあげます。この恩情は、もし対象とする人物がそれに値しないならば、わたくしはお願いするところではありませんが、

E.シャンパニユ
ロラン・ド・ラ

プラティエール家出身
née Roland de la
Platiere

いの後、わたくしの息子の巧みでか勇敢、献身的な行動に感じ入った充分な満足感をわたくしに伝えようと、手紙をくださつたりもしました。元帥の満足感は閣下のご厚情を希望でいつぱいにすることでしょう。

敬具



アフリカで活躍するロッシュ
『イリュストラシオン』1845年1月4日号

E.シャンパニユ
ロラン・ド・ラ

プラティエール家出身
née Roland de la
Platiere

敬具

甥、ロッシュの昇進を願うおば、シャンパニユ夫人の切々たる書簡である。書かれた年は、嘆願書（I）が、おそらく外務省側の書き込みと思われる日付から判断すると、一八五二年。ロッシュがトリエステ領事からトリポリ領事に転任した年である。

嘆願書（II）は、日付についての書き込みなどはないが、宛名の外相ワレウスキ伯爵の外相在任時期が一八五五—一六〇年であること、また「オフィシェール帶勲士について一一年になる」というくだりから（オフィシェール帶

E.シャンパニユ
ロラン・ド・ラ・

敬具

プラティエール家出身
née Roland de la
Platiere

勲士になるのが一八四五年、一八四五、五六年ころになるものであることがわかる。また、ここでは紹介しなかったが、嘆願書(二)とほぼ内容の三通の嘆願書には、一八五六、一月の受理印が押されていて、やはり「オフィ・エール帶勲士について一一年になる」というくだりがみえる。なお、この三通の宛名は皇帝陛下となっている。

嘆願書(二)で外相に頼み込んだが、うちがあかないでの、ついに直訴に及んだということであろうか。すでに四〇歳を越え、社会的地位も確立した甥、ロッショを案じるシャンパー・ニユ夫人とはいかかる人物であろうか。

おば、シャンパー・ニユ夫人は名門の出

おばの両親、ロラン・ド・ラ・プラティエール夫妻は『岩波西洋人名辞典』にものついているフランス革命期の著名人である。夫妻はブルジョワジーを代表するジロンド党の主なりリーダーで、夫は、ジロンド党が革命の実権を握り、内閣をつくると、その内相をつとめた。夫人は、ロラン夫人と称され、文学に優れ、そのサロンには多くの革命家が集まり、ジロンド党の本部と言われるほどだつたという。「ロラン夫人は情熱的で、はげしい正義感をもち、ジロンドの魂ともいえる女性で、友人やもとマニュファクチュア監督官をしていた夫、正直で凡庸なロラン・ド・ラ・プラチエールを介して大きな影響を及ぼした」(ソブール著『小場瀬卓三・渡辺淳訳『フランス革命』上　岩波新書)

ほどの人物であった。やがて、ジロンド党が対立するジャコバンとの争いに敗れると、ロラン夫人は捕えられて、断頭台の露と消え、それを聞いた夫も逃亡先で自殺する。

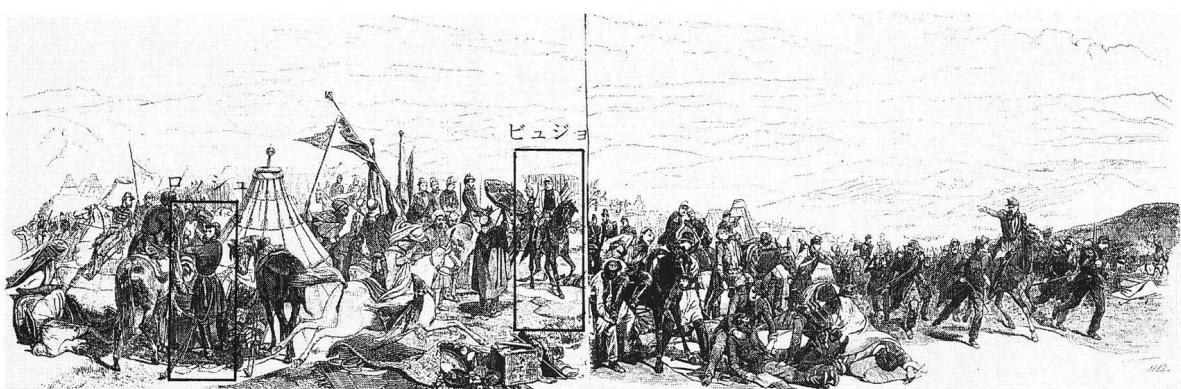
二人が悲惨な最後を遂げたとはいえ、ロッショは、この名門、ロラン・ド・ラ・プラティエール家につながり、そしてかれらの娘、ロッショにとつてはおばにあたるシャンパー・ニユ夫人のもので、その幼年時代を過ぎたのである。

なお、『日本外交史辞典』のロッショの項に「伯母に仏革命の女性論客ロラン夫人(Roland)をもつ」とあるのは、あやまりである。

ビュジョ元帥とイスリの戦い

ロッショを高く買つていたというビュジョ元帥(一七八四—一八四九)は、アルジェリア総督時代の一八四四年、イスリにモロッコ人を破る大きな戦い(イスリの戦い)を指揮し、この時、ロッショに出会つた。当時アフリカ派遣軍の通訳官をしていたロッショは、豊富な経験をいかしてビュジョを助け、めざましい活躍をみせた。功績が認められたロッショは、レジオン・ドヌール勳章の階位を上げ、オフィ・エールとなり(一八四五年)、さらに、ビュジョの後押しもあって、非常に稀有な例として外相に転身^{ゆき}J.P.Lehmann,

"Leon Roches-Diplomat Extraordinary in the Bakumatsu Era", *Modern Asian Studies*, 14, 2, 1980.) ハヤパー・ニユ夫人は、嘆願書(1)



1846年の官展に出品されたヴェルネ画「イスリの戦い」『1846年4月4日号

嘆願書の結果

シャンパー・ニユ夫人のこの努力は果たして報われたのであろうか。

夫人が望んだレジオン・ドヌール、コマンドゥール昇格は一八五八年のことである。嘆願が一八五五、五六六年ごろであるから、効果なきにしもあらずというところであろうか。

しかし、勤務地をヨーロッパへといふ願いは、とうとうかなえられなかつた。以後も、トリポリ領事、そしてチュニス領事とアフリカにあり、一八六年、さらに遠隔の地、日本への派遣命令がおりる。そして、日本での外交官活動を終えるのである。生没年がわからぬが、存命であれば、日本派遣を知った時のシャンパー・ニユ夫人の驚きと嘆きは、いかばかりであつたろうか。

本稿の作成にあたつては、ロッショの「個人記録」のコピーを萩原延壽氏に見せていただきました。また、このに紹介したシャンパー・ニユ夫人の二通の嘆願書の翻訳に際しては、中山裕史氏に解説原稿に目を通していただきました。末尾になりましたが、両氏に感謝申し上げます。なお、翻訳文の表現、および見解はすべて筆者の責任に帰すものです。(中武香奈美)

の中で、今は「さじユジョの名前を出し、一〇年以上も前のあの時のロッショの活躍を、外相に喚起させようとしたのである。

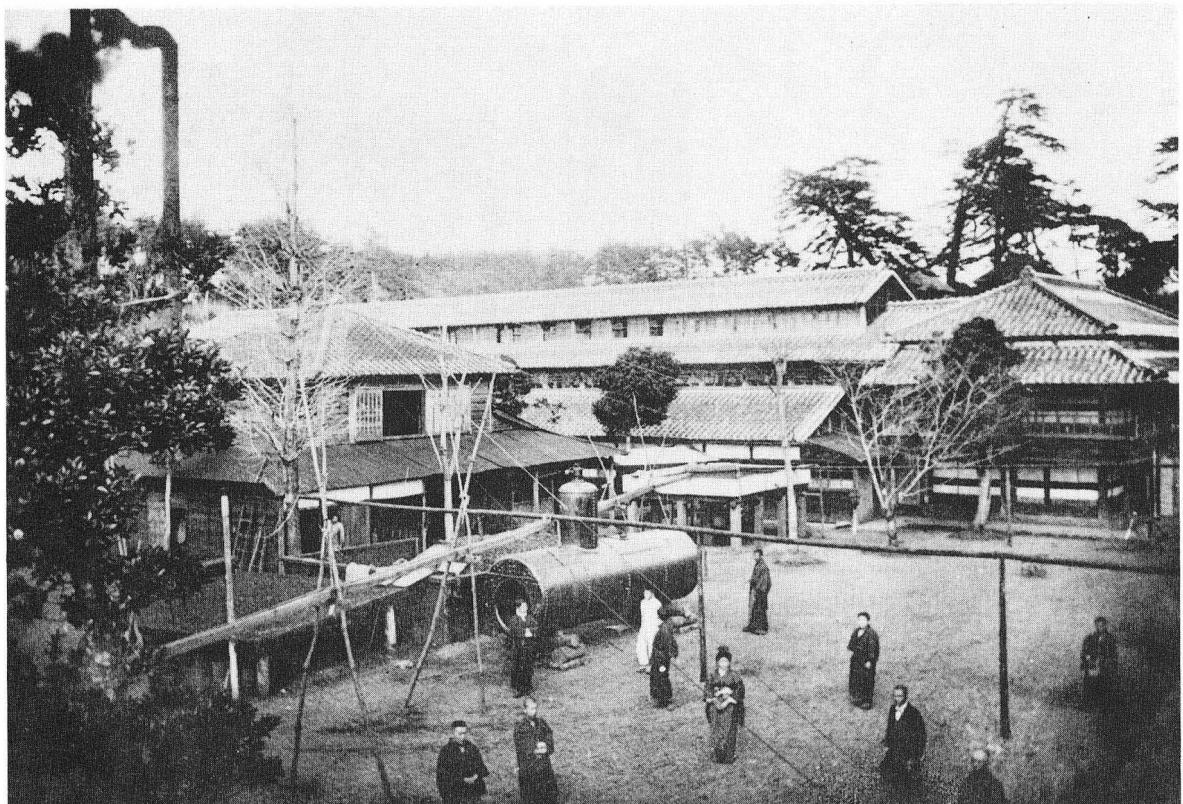
ずつ運搬したのが「持田家商工業ノ起原」だと記されている。副業として養蚕も行なわれた。幕末、横浜開港前のことである。



盛進社持田製糸第一工場（中和田村上飯田）

次代の角左衛門は酒造業を始めるかたわら、高座郡六会村に一町ほどの土地を取得し、それを桑園に開墾して、明治十六年頃から座織器二台、工女二名で製糸を始め、湘南社を通じて出荷するようになる。ところが翌十七年九月、暴風雨のため酒造施設の一いつくが倒壊され、貯蔵の酒三百石までが流出し、翌年には一家を挙げて腸チフスに感染、あまたさえ酒造税滞納の廉で破産宣告を受けてしまう。しかし、家屋宅地を売却した代金で生繭と踏縫製糸器械二台を購入、長男初治郎が中心となり、工女三名を増加して製糸を続け、翌十九年の好況に際会することができた。製糸家としての持田家の歩みが本格的に始まるのである。その矢先の二十一年、糸価の暴落で頓挫しかけたのを見兼ねた祖母と母が、「三十年來」のへそくり三百円を提供したので、倒壊した酒造庫の風損木を集めて工場を建設し、信州から器械を導入、工場を抵当とする借入金を新繭買入資金に当て、解散した湘南社の熟練工女を招いて器械製糸に乗り出した。二十一年四月のことである。この時、横浜の有力生糸元込商、若尾幾造との提携関係が生じている。当初水力を用いる予定だったが、近隣の農民から灌漑用水に支障をきたすという苦情が出たため、やむなく「足踏器械」つまり人力に頼らざるをえなかつた。蒸気機関の導入は二十六年、『事業経営録』には「四ヶ年間苦三苦ヲ重ナル足踏動力器械ヲ放棄シテ、文明ノ恩沢ニ浴スルヲ得たり」と記されている。

これより先の二十五年、若尾幾造、中和田村長石井仁左衛門の協力を得て、自社敷地内に販売組合盛進社を設立している。技術の向上、製品の均一化と共同出荷等のための製糸家の結社である。翌年には事務所を藤沢に移転し、これへの融資のため若尾銀行藤沢支店の開設を図り、最盛時には社員五十名、生糸製出額余万斤に達したという。明治三十二年、アメリカの機業地視察から帰国した角左衛門の発案で盛進



盛進社持田製糸第二工場（渋谷村長後）

合資会社を設立、高座郡渋谷村長後に直輸出模範製糸場を建設した。のちに持田第二工場である。四十一年には「若持式」なる煮繭術を考案して特許を取得し、その普及のための若持合資会社を横浜に設立している。「若持」とは若尾と持田の一文字をとつたものである。

浮沈を重ねつつも、経営規模は漸次拡大していった。日露戦争中には石炭不足のため、戦後には相場の乱高下で苦しんだことなどについては『事業経営録』に生々しい記述がある。それを乗り切った大正初期が全盛期であった。

『横浜貿易新報』大正十四年九月十四日号に、「機械製糸業の鼻祖、持田初治郎



藤沢の若尾別邸にあった先代角左衛門の銅像
若尾幾造（左）と持田初治郎

其普及を図り、自ら稚蚕共同飼育組合の設立の為奨励基金を醸集して之が発達に努め、大正五年には私財を以て『養蚕改良の栄』と題する冊子を広く配布。其の後にも数十種の刊行物により、或は和田村持田製糸場主持田初治郎氏は製糸界に於ける第一人者たるのみならず、蚕業界にも偉大なる功労者である。氏は文久三年の生れ、本年六十三歳、明治三十四年亡父角左衛門氏の遺業を継承、之が発達進歩を圖り、桑園の改良、蚕種・蚕繭の向上に努め、殊に火力乾燥法を改めて蒸気乾燥法に進め、若持式煮繭法を考案して同業者に分区改善、良成績を挙げた。蚕種に付ては日支交配蚕種の優良なるを認め、明治二十九年頃より広く養蚕家に無償配布、極力

擴大していった。日露戦争中には石炭不足のため、戦後には相場の乱高下で苦しんだことなどについては『事業経営録』に生々しい記述がある。それを乗り切った大正初期が全盛期であった。

『横浜貿易新報』大正十四年九月十四日号に、「機械製糸業の鼻祖、持田初治郎

其普及を図り、自ら稚蚕共同飼育組合の設立の為奨励基金を醸集して之が発達に努め、大正五年には私財を以て『養蚕改良の栄』と題する冊子を広く配布。其の後にも数十種の刊行物により、或は和田村持田製糸場主持田初治郎氏は製糸界に於ける第一人者たるのみならず、蚕業界にも偉大なる功労者である。氏は文久三年の生れ、本年六十三歳、明治三十四年亡父角左衛門氏の遺業を継承、之が発達進歩を圖り、桑園の改良、蚕種・蚕繭の向上に努め、殊に火力乾燥法を改めて蒸気乾燥法に進め、若持式煮繭法を考案して同業者に分区改善、良成績を挙げた。蚕種に付ては日支交配蚕種の優良なるを認め、明治二十九年頃より広く養蚕家に無償配布、極力

實に前後四十数回、蚕糸界其他各種の名譽職を歴任して、現に引き継ぎ県製糸同業組合長たり。二個所の工場、五百釜、六百の職工を使役して、年額十萬斤内外の製造生糸を出している。大正六年三府十三県蚕糸業有志は、氏の為に頌徳碑を同村和泉地蔵原の県道に沿ひて建説、其徳を永遠に伝へて居る。

ところが、わずか一ヶ月半後の十月三十日号には、「持田製糸の負債七十万円に上り債権者の直接行動、惜るゝ四十年の歴史」と題し、「債権者は押かけて膝詰談判をなし、不穏の言動さて膝詰談判をなし、不穏の言動さて去らんとする者ありしより、戸塚署長は部下を引率して急行、鎮撫する処あり」という記事が出ている。

次は「持田製糸綻に、狼狽の関係者」と題する翌日の記事である。

「府下南多摩郡鶴川村及隣接田奈、柿生諸村の養蚕家にして、同工場に蘭

代金貸元をなしたる関係者は狼狽を極め、二十八日以来会員登壇後策考研究中。『事業経営録』には「褒賞事項」三二件、「寄附事項」一二件の記載がある。そうかと思うと、「家破滅ノ場合ニハ諾」を得たことも記述されている。製糸業が「一ノ投機的事業」とみなされるをえなかつた実態がよくわかる。

同書中異彩を放つ項目に「余ノ道楽」がある。「人ハ酒ニ女ニ人世ノ春ヲ樂ムノトキ吾ハ只管殖林ヲ樂ミ」云々として、「如何ナル製糸不振ノ年ト雖モ山林五畝以上杉松等ノ樹林ヲナサヅル事ハ二十五ケ年嘗テ一回モナシ」と記し、「又四十三年春當業失敗紀念木トシ新宅ニ周囲八尺ノ楓ヲ植樹セリ」と結んでいる。ここに見られるのは、財産や名譽など成功の所産だけではなく、失敗をも含めて事業そのものを愛し、生きがいとするような人間類型だといえよう。それはまた、日本の製糸業の発展の原動力の一つを示すものでもあるのではないか。『事業経営録』は、そのような人間類型を彫琢してみせた経営者として、文学的にも生彩に富む記録となつてゐる。

末尾ながら、『事業経営録』は大塚十三氏が当館に寄贈された、父君故十一氏の収集品に含まれるものであること、現地調査にあたつては、上川井小学校長有馬純律氏（郷土戸塚区歴史の会副会長）より種々ご教示を得たことを付記して本稿を閉じる。

迷の主糸壳入商

25

二代目 中居屋重兵衛

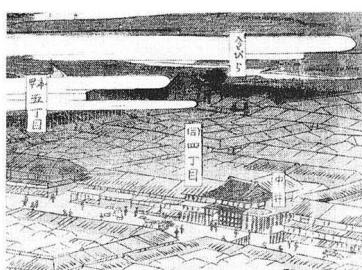
中居屋重兵衛は日本が開港した直後に横浜に進出した生糸販込商で、数多い横浜商人の中へ一頭地を抜いた商人として伝えられる人物である。にもかかわらず、その実像は謎に包まれた部分が多く、残された史料も極めて少ないと言われている。しかし、最近筆者は、幸いにも中居屋関係の新史料を目にすると機会に恵まれ、いくつかの新事実を知ることができた。残念ながら、この史料は、一般に公開されてないが、ここで、この新史料を紹介し、「謎の売込商」の実像に迫ってみたいと思う。

さて、この新史料というのは、長野県上伊那郡辰野町の小野忠秋家に伝存したものである。同家の先祖、小野兵助は幕末から明治初年にかけて横浜本町五丁目の名主をつとめ、同家には小野兵助が記した記録が少なからず残された。これらの記録は、当時の横浜の状況を知るための一級史料であり、の中に中居屋関係の史料が含まれていた。その内容については後で述べることとし、まず、史料を掲げてみよう。

明治三年正月十四日

四丁目下野屋勘兵衛より中居屋重兵衛
金子用達置候間、拝借地上地申出候節
は為知呉候様、栄次郎殿を以申出候事

同年十一月七日
永島亀次郎より
長丘衛地所一条
衛より上地いた
所相渡候様可致
之に付、如何之
れにも伺之上沙
同年十一月三十
永島亀次郎・中
条示談方之義申
呼出し、同人よ
方之儀申聞候丸
本町通りの中居昌
二代広重・横浜
走ることにな
た。当时、横浜
債をめぐつて訴
襲名し、家督を
以後、二代目重



—代庄横浜風景—

四百九

であつた。おそらく、中居屋はこれら
の商人から借金をし、抵当に本町四丁
の地所を入れ、その処理をめぐつて
の訴訟のように思われる。また、十一
月七日の記事には「外国人借用有之」
とあり、外国商館にも借金があつたこ
とをうかがわせる。さらに、中居屋の
奉公人らしき人物とも問題があつたよ
うで、十月三日の記事に五百五十両を
渡して示談になつたとある。

これら一連の事件が落着したのは十
一月に入つてからで、十一月七日と十

永島隼次郎・中居千丘律(より常盤屋)
条示談方之義申出候間、下野屋勘兵衛
呼出し、同人より十兵衛江用達金示談
方之儀申聞候処、後刻迄と申引取候事

永島隼次郎より中居屋重兵衛・常盤屋長兵衛地所一条に付、立入候處、十丘衛より上地いたし、五郎右衛門方江地所相渡候様可致候へ共、外国人借用有之に付、如何之旨問合有之候間、いつもも伺之上沙汰可致旨申遣候事

以上 中居屋が閉店する直前の史料を紹介したが、この史料から「謎の売込商」といわれてきた中居屋の姿がわずかではあるが、明らかになつたと考へている。今後も、こうした史料の発掘につとめたいと思つており、読者の方々からのさまざまなお問い合わせをお待ちして
いる。

「横浜人物小誌」の通番が乱れました。
本号で訂正させて頂きます。

▼展示
 (1)『商標に見る生糸の歴史—日本製糸業と横浜貿易』
 8／1～10／28

行事開催予定(平成二年度)



閲覧室

から

今回は、明治初期に横浜で創刊された洋雑誌を紹介します。

○ザ・ファー・イースト (The Far East)

イギリス人、ブラック(John Reddie Black)により、一八七〇年(明治11)五月三十〇日に創刊された。初め月一回刊行で、一八七三年(明治6)七月から月刊になった。また、六巻四号より

一八七五年(明治8)八月三十一日発行の七巻一号で中断し、翌年七月から改巻して一年半にわたり上海で発行されたようだ。

横浜で発行されたものは複刻版で、上海で発行されたものは原本で(次号有り)閲覧することができる。

「ザ・ファー・イースト」に定期集会の記事をのせてある。

アジアティック・ソサエティー・オブ・ジャパンは、同会の研究報告書として一八七四年に一巻がだされた。内容は日本及びアジアに関する学術全般にわ

たつており、貴重な論文も多い。原本及び複刻版で閲覧できる。

発行所を横浜から東京に移している。日本の風景や風物の写真を鶴卵紙に焼き付けて、そのまま貼りこんでいるのに特色がある。本文の内容は、日本の歴史や慣習のほか、横浜外国人居留地の都市問題、近代化に対する民衆の対応などもえがかれている。誌上に掲載されたブラックの回想記は、著書『ヤング・ジャパン』(Young Japan)執筆の動機になつた。

日本アジア協会は、一八七一年(明治5)一〇月R·G·ワトソンらにより約百人の会員を擁して創設された。メンバーには、イギリス公使ハリー・パークスをはじめとしてベボンやアーネスト・サトウなどよく知られた人物も多い。前出のブラックもその一人で、

「ザ・ティー・イースト」に定期集会の記事をのせてある。

一八八一年(明治14)一月創刊の月刊誌。一巻がケリー商会、二巻はマムと改題した後、六

三巻一号より「クリサンシマム・アン・ム・トヨニックス」(The Chrysanthemum and Phenix)と改題した後、六

号で廃刊。

原本で閲覧できる。(以下次号)
 (上田由美)

の刊行を予定している。

▼講座 (各全五回 詳細未定)

(1)『横浜の芝居』展関連講座 11／10、17、24、12／1、8 講師未定

(2)資料講議会(平成3年1月から)
 (3)『横浜の新聞と雑誌』展記念講座(平成3年3月から)

(1)『横浜港災復旧工事竣工祝賀記念絵葉書三点』(横浜港概要)、『扶桑新誌』(南北区太田町 増田好夫氏)

(2)茂木商店商況報正書他生糸関係資料
 11月(戸塚区平戸 加藤一男氏)

▼歴史講演会
 (1)『横浜開港と鶴見の村々』 10／20
 (2)『横浜開港と大岡川の周辺』 11／24(土)午後1時 南地区センター

講師内田四方蔵 当日会場にて受付
 受講料無料

▼人事異動
 (3)『横浜の新聞と雑誌』(仮題) 2／6～4月下旬

横浜は、近代日本の情報基地であり、ジャーナリズムのメッカであった。その具体的な姿を、当館所蔵の資料を紹介する。同時に所蔵の新聞・雑誌目録

たつており、貴重な論文も多い。原本及び複刻版で閲覧できる。

企画調査室長 佐藤孝(1月1日付)
 副館長 荒木誠二(6月1～8日付)
 館長 渡谷安久(7月1日付)